平成２５年度成果報告書

Ⅰ．業務の内容

１．業務の題目

「伝える」科学コミュニケーションに関する基礎調査

２．担当フェロー

渡辺　政隆

３．当該年度における成果

①科学コミュニケーションの全国的ネットワークの構築

ａ．イベント、フェスティバルのノウハウを共有するための方策を検討した。

・2014 年 3 月 8～9 日に静岡科学館る・く・るで開催された「サイエンスピクニック 2014」において、三上・八木ユニット等の協力の下、日本サイエンスコミュニケーション協会地域連携委員及び同若手の会有志の参加を得て、「さんかく△テーブル」を用いた生物多様性ワークショップとスマホ顕微鏡に関する研修を実施した。

・正解のない社会的課題について語り合う場づくりの手法、身近な装置を用いて科学の扉を開く工夫、個々の科学コミュニケーターが開発したツールなどに関する情報を交換し合うことで、各地における科学コミュニケーション活動の活性化を図る手がかりがつかめた。

・今後、さまざまなアクター間でこのような交換会の場を設ける工夫を提案していきたい。

ｂ．科学コミュニケーションのさらなる推進と社会への浸透を図るために、PCST2018 の日本開催招聘案を作成した。

②「ミドルメディア」をキーワードに、市民が必要とする情報の流通方式を検討した。

ａ．都内でミドルメディア実行委員会を数回開催し、過去 2 回実施したシンポジウムの内容の公開方法等を検討した。

ｂ．問題意識を共有するために、シンポジウムのエッセンスを共同作業で抽出し、それを反映させた各 5 分のシンポジウム紹介ビデオクリップの製作を実行委員の小林隆司氏に依頼した。

ｃ．サイエンスアゴラ 2013 において、ワークショップ「情報の救急箱としてのミドルメディアは可能か」を実施した。

・35 名余りの参加者を得て、過去 2 回のシンポジウムの報告（ビデオクリップ上映）の後、グループディスカッションを行った。

・「どのような情報をどのように？　①発信する側　②受ける側」をテーマに、6 グループで議論した。

・その中で、地域におけるメディエーターの必要性と、それが果たすべき役割の重要性が認識された。それは専門家と市民をつなぐミドルマンという存在になる。

・また、メディエーターを孤立させないために、その支援体制としてのミドルレンジメディア（従前の「ミドルメディア」から改称）の整備が必須である。

・ミドルメディアレンジのあるべき姿を検討した。